

「大友深定達玄の碑」について

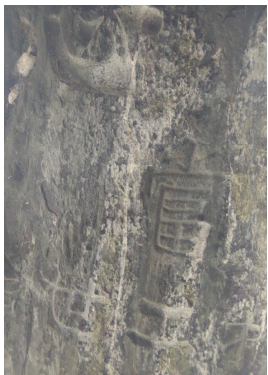
整理番号	題額	題額揮毫	碑記撰文	碑記揮毫
福岡〇七	當山拾二世大友深定 拾三世大友達玄碑	西澤盡史	—	西澤盡史

鐫刻	撰文建碑年	住所	場所	備考
—	一九一一・明治四四	直方市下境	光福寺	

一．はじめに

本石碑は、光福寺第十二代住持大友深定と第十三代住持大友達玄を顕彰する碑である。建碑者は、おそらく第十四代住持大友鉄洲であろう。現在石碑は、背面を上にして横たえられており、正面は全体を視認できない状態である。正面の文言については不十分な翻刻に止まる。

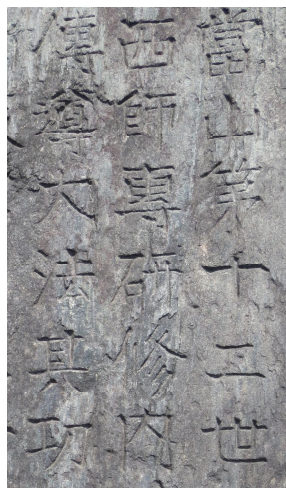
○写真１ 石碑正面（部分）



○写真2 石碑背面



○写真3 「碑記」部分



二・翻刻並に訳注

■翻刻

(正面)

拾

當二 大友深定

＊

世

碑

拾

山三 大友達玄

世

●校勘

＊「當山」の段の上に「心」を含む一文字があるが、石碑を並べる台と重なっており、全体を判読しがたい。

(背面)

當山第十二世深定師十一世帶眞師長子也母豊前水原出於長壽寺資性温厚學東肥就于勸學都
西師專研修内典二十歳而繼職當此時當山頽廢在困厄之惡運師志之回復一意専心策勵門徒而

傳導大法其功不空皆蒙其德澤于今地方門徒之法緣最賑也又知濟家之要質素勤勉以見今日當山設二男三女薄我身焦心之慈育而兩男學業之熟達實因師慈恩者矣萬延七年修宗祖大師六百回大遠忌其盛筵至今傳古老之口碑明治十三年起工師與門徒勦力拮据經營遂明春十四年再建九間四面之本堂之則專因師之熱情然至今門徒一同仰師德澤爲當山中興之住也

第十三世達玄師深定師長子也母照代蘆屋出於安養寺資性溫順夙遊東肥就于勸學適冕司教峰春師修內典就于禿安慧老學佛曆天學後就于萬行寺七里師修餘乘明治十七年繼職能領大父之意專心全當山住職之本責又於當班昇進于上座二等特別新築庫裏設學寮專勸學布教南船北馬席無暖門徒一同皆所美其德也明治廿九年助教拜命同卅四年三等巡教師全年大日本佛教慈善會財團福岡大區獎勵員長拜命

明治四十四年辛亥三月盡史西澤書

*異体字等

○歲 歲。 ○經 經。 ○座 座。

■ 訳注

● 本文（いわゆる旧字体とし、一行毎に改行した）
（正面）

◎ 題額

* 當山拾二世大友深定 拾三世大友達玄碑

● 校勘

* 「當山」の段の上に「心」を含む一文字があるが、石碑を並べる台と重なっており、全体を判読しがたい。

（背面）

◎ 碑記

當山第十二世深定師、十一世帶眞師長子也。

母、豊前水原出於長壽寺。

資性温厚、學東肥、就于勸學都西師、專研修内典。

二十歳、而繼職。

當此時、當山頽廢、在困厄之惡運。

師志之回復、一意専心、策勵門徒、而傳導大法。

其功不空。皆蒙其德澤、于今、地方門徒之法縁、最賑也。

又知濟家之要、質素勤勉、以見今日當山。

設二男三女、薄我身、焦心之慈育。

而兩男學業之熟達、實因師慈恩者矣。

萬延七年、修宗祖大師六百回大遠忌。

其盛筵、至今傳古老之口碑。

明治十三年、起工、師與門徒、勦力拮据經營。

遂明春十四年、再建九間四面之本堂。之則、專因師之熱情。

然至今、門徒一同、仰師德澤、爲當山中興之住也。

第十三世達玄師、深定師長子也。

母照代、蘆屋出於安養寺。

資性温順、夙遊東肥、就于勸學適冕司教峰春師、修内典。

就于禿安慧老、學佛曆天學。

後就于萬行寺七里師、修餘乘。

明治十七年繼職。

能領大父之意、専心全當山住職之本責。

又於當班昇進于上座二等特別。

新築庫裏、設學寮、專勸學布教、南船北馬、席無暖。

門徒一同、皆所美其德也。

明治二十九年、助教拜命。

同三十四年、三等巡教師。

全年、大日本佛教慈善會財團福岡大區獎勵員長拜命。

明治四十四年辛亥三月、盡史西澤書。

● 訓詁

◎ 題額

當山拾二世大友深定、拾三世大友達玄の碑。

◎ 碑記

當山第十二世深定師は、十一世帶眞師の長子なり。

母は、豊前水原の長壽寺より出づ。

資性温厚、東肥に學び、勸學都西師に就きて、専ら内典を研修す。二十歳にして職を繼ぐ。

此の時に當り、當山頽廢し、困厄の惡運に在り。

師、之が回復を志し、一意専心、門徒を策勵して、大法を傳導す。

其の功空しからず。皆な其の德澤を蒙り、今において、地方門徒の法縁、最も賑はふなり。

又た濟家の要を知り、質素勤勉にして、以て今日の當山を見る。

二男三女を設く。我が身を薄くして、心を焦がして之れ慈育す。

而して兩男學業の熟達は、實に師の慈恩に因る者なり。

萬延七年、宗祖大師六百回大遠忌を修む。

其の盛筵、今に至るまで古老の口碑に傳はる。

明治十三年、工を起し、師と門徒と、力を勗せて拮据經營す。

遂に明春十四年、九間四面の本堂を再建す。之れ則ち、専ら師の熱情に因る。

然して今に至るまで、門徒一同、師の德澤を仰ぎ、當山中興の住となすなり。

第十三世達玄師は、深定師の長子なり。

母は照代、蘆屋の安養寺より出づ。

資性温順、夙に東肥に遊び、勸學適冕、司教峰春師に就きて、内典を修む。

禿安慧老に就きて、佛曆天學を學ぶ。

後ち萬行寺の七里師に就きて、餘乘を修む。

明治十七年、職を繼ぐ。

能く大父の意を領し、専心當山住職の本責を全うす。

又た當班において上座二等特別に昇進す。

新たに庫裏を築き、學寮を設け、専ら勸學布教し、南船北馬、席の暖まること無し。

門徒一同、皆な其の德を美とするところなり。

明治二十九年、助教拜命す。

同三十四年、三等巡教師となる。

全年、大日本佛教慈善會財團福岡大區獎勵員長拜命す。

明治四十四年辛亥三月、盡史西澤書す。

● 人物

○當山第十二世深定師 光福寺藏の大友家系図（以下「光福寺系図」）には、文政六（一八二三）年から明治十六（一八八三）年。その事蹟に「本堂、大師堂再建、宮殿厨子卷障

子。宗祖聖人六百回御遠忌（安政五年）」とある。

○十一世帶眞師 光福寺系図には、寛政四（一七九二）年から安政四（一八五七）年。その事蹟に「山門再建（天保五年六月）」とある。

○（深定）母 「光福寺系図」に「究竟院釈尼妙運…天保六年二月廿五日、（帶眞）坊守、三十三才、豊前築上郡水原村長壽出」とある。

○勸學都西師 勸学は、真宗本願寺派で定める最高の学階。都西師は、天明二（一七八二）年から慶応元（一八六五）年。肥後国（熊本県）下益城郡豊田村の養泉寺に生まれ、のち同国鹿本郡山鹿町光顕寺の第十五世を嗣ぐ。環中・到徹らに就いて宗学を攻究し奥義を窮めた。弘化二（一八四五）年の安吾（夏に僧達が集まり籠もって座禅修行する勉強会）では司教として正信偈の副講を、嘉永五（一八五二）年の安吾では正像末和讃の副講をそれぞれ担当。同年に勸学に補任された。それ以前から自坊に寮舎を設け学徒を集めて講授し、百余名の大衆を養成した。光福寺の深定師もその一人。

○十三世達玄 光福寺系図には、弘化四（一八四七）年から大正十二（一九二三）年。その事蹟に、「庫裡改築、學寮開ク、客殿新築、大師堂改築、須弥壇並彩色。宗祖聖人六百五十回御遠忌（明治四十年）」とある。本碑建立の明治四十四年はまだ存命であったが、おそらく住職は、息子の鉄洲に譲っていたであろう。

○勸學適冕 不詳。

○司教峰春師 司教は、浄土真宗本願寺派の学階のひとつで、勸学の次の位。峰春は、光福寺十二世深定師の弟で、熊本の寺院に養子に行った。達玄師は、おじに当たる峰春師に就いて仏道修行をした。

○禿安慧老 禿は姓で、老は敬称。文政二（一八一九）年から明治三十四（一九〇一）年。肥後国阿蘇郡北小国村善正寺住職。善正寺は本願寺熊本別院である。十六歳で同寺を嗣ぐ。のち菊池郡隈府町渋谷忠太翁のもとで漢学を修め、南溪勸学に就いて宗乗と余乗を就学した。さらに普門律師の遺書を辿って仏教天文学を研究し「天文三字経」（天文地理のことを三文字づつの漢文でやさしく解説したもの）を著した。国学にも造詣が深かった。学階は輔教（司教の次の位）であったが、死後司教を贈られた。達玄師は峰春師について仏道を修業することとあわせて、安慧師のもとで天文暦法の勉強もした。

○七里師 七里恒順。七里は姓。天保六（一八三五）年から明治三十三（一九〇〇）年。越後国（新潟県）三島郡飯塚村（現長岡市）明鏡寺に生まれる。弘化二（一八四五）年、十一歳で出家し、十四歳で勸学僧朗の門に入る。さらに月珠ら名匠に師事すること十年、研磨甚だ積む。元治元（一八六四）年、本願寺派の西の拠点である、博多の万行寺に入り、慶応元年に住職となる。明治十年前後には、中講義、大講義に任ぜられ、同十四年には執行の要職に就いて事務を整理した。翌年には自坊に退き、道俗の教化指導に努めた。宗派を大いに盛り上げ、名僧と称された。万行寺では私塾を開いたり子ども会を組織するなど、幅広い層を対象に、社会活動的な働きをした。達玄師は、自分の直接の師匠である峰春師以外の、別の老師に就いても幅広く仏道修養をした。

○盡史西澤 不詳。

○十四世鉄州 光福寺系図には、明治十（一八七七）年から昭和三十六（一九六一）年。その事蹟に「基本財産（大正七年）庫裡（北四間引）、境内拡充、経大改築、石垣築造、参道新設、大師堂銅板葺。勝如上人御下向（昭和拾三年十月十四日）」とある。

●注

- 長壽寺 浄土真宗本願寺派。現、福岡県築上郡築上町大字水原にある。
- 資性 生まれつきの性質。
- 温厚 穏やかでやさしいさま。
- 東肥 肥後、熊本県。都西に就いたとあれば、山鹿の光顕寺であろう。
- 内典 仏典。仏教以外の書籍を外典という。
- 二十歳 天保十三（一八四二）年にあたる。
- 頽廢 建物が荒れる。
- 困厄 困り果てる。
- 惡運 よくない運命、不運なめぐりあわせ。
- 一意専心 一つのことだけに集中する。
- 策勵 熟語はないが、策は、むちうつ、で鞭撻の意。勵は励ます。励まし導く。
- 大法 大いなる教え、仏の教え。
- 德澤 恵み、恩沢。
- 法縁 仏法に会う因縁。
- 濟家 済は救う。家計のことをうまくやりくりすること。
- 薄 薄くする。軽んじて気に懸けない。
- 焦心 あせるさま、心配なさま。
- 慈恩 慈愛に満ちた恩愛。
- 萬延七年 万延は二年までしかない。光福寺系図では、安政五（一八五八）年に大遠忌法要の記録がある。
- 宗祖大師六百回大遠忌 親鸞聖人没（一二六三年）後六百年を記念する法要。
- 盛筵 盛んな宴会。ここでは酒宴ではなく、法要が盛大だったこと。
- 口碑 口伝え。
- 明治十三年 西暦一八八〇年。
- 拮据 口と足を忙しく動かし、疲れるまで働くこと。もと鳥の巣作りのさまを言う。
- 經營 計画を立てて事業を営む。
- 再建 九間四面之本堂 光福寺系図に深定師の事蹟として「本堂再建」がある。
- 之則 是則と同じと解した。

○安養寺 浄土真宗本願寺派。現、福岡県遠賀郡芦屋町。

○東肥 直接の師である勸学適冕と峰春師がどこの寺院のものであったか明記されていないが、父の深定師が山鹿の光顕寺で学んでいたので、達玄も同じ光顕寺で修行したのだろう。

○温順 穏やかですなお。

○佛曆天學 安慧は仏教天文学を研究していたとあれば、仏教関連の曆と天文学について学んだのだろう。

○餘乘 他の乗り物の意。自派の教義を宗乗というのに対し、他の宗派教義を言う。万行寺は本願寺派であるので、七里師から「余乗を学ぶ」というのはつじつまが合わないが、光福寺は代々熊本の寺院で学んできたので、博多の万行寺での学びを「他流試合」の扱いとしたのではないか。

○明治十七年 西暦一八八四年。

○領 受け取る。

○大父 祖父だが、先祖代々の意味だろう。

○當班 本願寺派の直方区のことか。

○上座二等特別 不詳。

○南船北馬 中国の南方は川が多いので船で旅をし、北方は山野が広がるので馬で旅をする。その地域に適した交通手段を用いること。日本では、南から北まで各地を忙しく旅して回ることをいう。

○美 賛美する。

○明治二十九年 西暦一八九六年。

○助教 本願寺派の学階のひとつ。司教の次の位。

○同三十四年 西暦一九〇一年。

○三等巡教師 不詳。

○大日本佛教慈善會財團 浄土真宗本願寺派の社会活動を担う組織。

○明治四十四年辛亥 西暦一九一一年。

●口語訳（章立てと小見出しは訳者が便宜的につけた）

◎題額

當山拾二世大友深定、拾三世大友達玄の碑。

◎碑記

一「大友深定師」

【深定師の出自】

当蓮華山光福寺の第十二世深定師は、（文政六年）十一世帶眞師の長子として生まれた。母は、豊前国築上町水原の長寿寺より嫁いでこられた。

【深定師の性格と修学】

深定師は、生まれつき穏やかでやさしい性質だった。

熊本山鹿の光顯寺に遊学し、勧学都西師について、もっぱら仏典を研修された。

【住職就任】

天保十三年、二十歳のときに、光福寺の住職を継がれた。

【光福寺復興】

そのころ、光福寺は建物が荒れており、何事にも困り果てるといふ、不運な巡り合わせの中にあつた。

深定師は寺運の回復を志し、心をその一点に集中し、門徒達を励まし導いて、仏法の伝道に邁進された。その働きは功を奏し、寺運の回復を見た。ひとびとはその恩沢を蒙り、光福寺の門徒の法縁は、この地において最も賑わうものとなった。

深定師は、他方で寺院の経営にもたけており、質素勤勉に努めた結果、今日の光福寺の隆盛をもたらしたのである。

【子どもの教育】

深定師は、二男三女を設けた。我が身のことは顧みず、ひたすら心を尽くして子どもたちの慈育に努められた。二人の男子の学業における熟達は、ひとえに深定師の慈愛に満ち

た恩愛の賜物であった。

【宗祖聖人六百回御遠忌】

万延七年（安政五年）、宗祖大師六百回大遠忌を営んだ。
その法要の盛大さは、今に至るまで古老の口伝えに伝えられている。

【本堂再建】

深定師は、本堂の再建を志し、明治十三年に工事を始めた。
師と門徒と、力を合わせて、疲れ果てるまで働き続けた。

そして遂に明春の明治十四年に、九間四面の本堂を再建するに至った。これは、専ら深定師の熱情によるものであると言えよう。

【当山中興の住持】

かくして、明治末の現在に至るまで、門徒一同、深定師の恩沢を仰ぎ慕い、「当山中興の住持」と称し、褒め称える次第である。

二「大友達玄師」

【達玄師の出自】

当蓮華山光福寺第十三世達玄師は、（弘化四年）深定師の長子として生まれた。
母は照代、筑前の国蘆屋の安養寺より嫁いでこられた。

【達玄師の性格と修学】

達玄師は、生まれつき穏やかで素直な性質だった。

早くに、熊本の光顕寺に遊学し、勸学適冕と司教峰春師について、仏典を研修した。また阿蘇小国村善正寺の禿安慧老師について、仏暦天学を学んだ。さらにのちに、博多の万寺の七里師について、改めて浄土真宗本願寺派の教学を研鑽された。

【住職就任】

明治十七年、三十七歳で、光福寺の住職を継がれた。

達玄師は、よく先祖以来の意思を受け継ぎ、当山住職の本責を心の一つにして全うされた。

また当地区において、上座二等特別に昇進した。

【伽藍の復興と南船北馬の活躍】

また、新たに庫裏を築き、学寮を設けた。ひたすら学問の勧めと布教に邁進し、各地を駆け回って席が温まる暇もないほどであった。

門徒一同、みな、達玄師の恩徳を賛美するものであった。

【宗門での活躍】

明治二十九年、四十九歳で、助教を拝命した。

同三十四年には、五十四歳で三等巡教師となる。

同年に、大日本佛教慈善會財團福岡大区獎勵員長を拝命した。

【記事】

明治四十四年辛亥三月、西澤盡史が揮毫をした。

三. 資料

『旧下境村誌』

●人物

「光福寺先住職 故大友達玄氏

弘化四年本村光福寺に呱呱の聲をあげられた、曾って熊本縣峯春氏の膝下にて佛學を修め後福岡萬行寺七里氏の門下にて余乘を研究し、明治十七年本寺住職となられた、爾來一屏佛道の研鑽をなし修養をつまれつゝ、佛教布教の爲め東奔西走座の暖まる暇もなかったのであった。同二十九年助教を仰せ付けられ、三十四年三等巡教師を拜命した。尚同年佛教慈善會財團福岡大區獎勵員長となられた等銳意宗門の發揚に努められると共に寺運の隆昌にも勤められつゝあつた惜しい哉大正十二年九月入寂された。本山は氏の生前の功勞を賞し特命にて定專院の號を下附されたのは死後の光榮である。」

「光福寺住職 大友鐵洲氏

明治十年五月十日熊本縣下前原家に呱呱の聲をあげられて後年大友家を繼がれた、氏は同三十三年京都本派本願寺文學寮を出られ以來多年佛學の研究を續けられた後、本寺住職となられ開基大友法雲第十四世を繼がれたのである。而して氏は宗門の舉揚につとむると共に寺門發展の爲めに全力をあげて努めて居らるるのみならず一面郷土子弟の指導に深く意を注いで佛教日曜學校を起して兒童の教養をなし又青年處女を善導する等社會教育上に貢獻されつゝある勞や多大である、尚鞍手郡眞宗組合協議員たる等一意佛法の爲めに努めつゝ益々寺門を隆盛ならしめつゝあるのである。」



光福寺先住職
故大友達玄氏



光福寺住職
大友鐵洲氏

四、主な参考資料

①翻刻

・なし

②論文など

・和田泰光編『旧下境村誌』（筑豊之実業社、一九二七）

＊一九二六年、直方町、頓野村、新入村、下境村、福地村が合併して新直方町となり、下境村は消滅した（町は、一九三一年に市制移行）。そこで、旧下境村の歴史や伝承、人物などを書き残すことを目的として編纂されたもの。同時期にやはり筑豊之実業社から「創建三百年直方記念誌」「頓野併合記念誌」「旧福地村村誌」が刊行されている。

・龍谷大学編『佛教大辞典』（富山房、一九七六）

二〇二五年四月 薄井俊二訳す